科挙と大学入試

信金中金月報掲載論文編集委員長
地主　敏樹
（関西大学 総合情報学部教授）

科挙といえば、昔の中国のエリート選抜制度である。学生時代に読んだ故宮崎市定教授の著書では、カンニング防止のタコツボ型個室が並ぶ試験会場の写真の印象が強い。試験時間があまりに長大なので、大変な試験という感想でしかなかった。ところが最近、科挙の重要性を再認識させられることになった。近年盛んに中国史関連の著作を発表している岡本隆司教授の『中国の論理ー歴史から解明するー』（中公新書）を読む機会があった。

日中関係悪化の中、中国政府・共産党の言葉や論理は不当にみえることが多いものの、中国史を知ればそのベースを思いやることができようという本である。第1章第1節が「儒教」で、「日本人は儒教を知らない」という。続いて、中国の伝統的史学が説明される。王朝毎の歴史が次の王朝によって作成され、前王朝の衰微と現王朝の儒教的正統性を示してきたのだという。現代風の客観的な歴史学ではなく、儒教的価値判断に基づいた正邪評価が、中国の歴史認識なのである。勝者が歴史を書くのは万国共通だろうが、儒教的正統性に立脚しているという書き手の自己正当化が、今や嫌らしく見えるのではないだろうか。

どうして儒教ベースなのか。中国社会への儒教の浸透に、科挙が貢献したことが説明される。科挙の試験勉強の中核は、儒教の経典＝四書五経とその解釈本の丸暗記だったという。時代と共に増えていく史書も勉強しないといけないので、読むべき典籍は膨大となる。あまりに大変なのでダイジェスト本が続出したが、単純に正邪評価をしがちな弊害があった。さらに、四書五経には行政や経済あるいは工学など実用的な内容が欠けているため、いくら勉強しても実務能力が身に付かない欠点もあった。それでも、儒教の説く「礼」を修得した人＝「士」が科挙を突破して特権的エリートになる一方で、「礼」を知らない人は「庶」民であるという、上下二元構造の社会が構築されてきた。科挙は隋唐期から清末まで千年余り続き、全土に広がった受験勉強を通して儒教が中国社会に深く根付いたというのである。

尖閣や南沙などの領土問題にも、やはり儒教と関連する中華と外夷との上下意識が関わってくる。儒教の「礼」を知る国＝「華」とそうでない国々＝「夷」との上下二元構造が、国際関係に関する中国の伝統的認識であるとのこと。この「華夷」意識に基づいて、周辺諸国を見下してし

まうのだ。中国共産党の認識する中国の範囲は、清朝期の大きな版図だとも指摘されている。騎馬民族系の清朝は、多様な地域の文化慣習を尊重することで大きな版図を統合できた点を、彼らは無視している。幾度も騎馬民族に征服されてきたが、その都度、征服者が中華の文化に同化してきたという認識もあるという。こうした「華夷」意識のため、清末の国難に直面しても、西洋の優位性をなかなか認めることができず、日本の文明開化に後れをとったとのこと。清朝改革派が政変に負けて日本に亡命し、西洋の諸概念を翻訳した「和製漢語」が鏤められた文章を「和文漢読」して、思想が一変したという。儒教概念が詰め込まれた中国エリートの頭脳では、西洋の考え方を正当に受容できなかったのだ。

こうした科挙にまつわる話を読むと、日本の大学入試を連想させられた。日本の現在の大学受験が科挙のように大変だというのではない。むしろ、大学受験の難易度は年々低下してきているようだ。科挙との類似点は、試験内容が有用性を失って「ガラパゴス化」しつつある点だと、考えている。その第1は、「私学文系型」入試で数学を受けない受験生が増えてきた点である。入学難易度ランキングにおいて、試験科目数を減らせば合格偏差値と順位が上昇することが、私学文系型入試蔓延の主因だろう。世の中のニーズに反して「分数の分からない大学生」が増殖した。第2は、出題内容の「パターン化」の進行である。出題サイドでは、作問が容易になる「パターン化」は望ましい。高校サイドでも、教師の指導に従って努力した学生が報われることを望むならば、「パターン化」が好都合だ。しかし、「パターン化」は変化を排するので「ガラパゴス化」に直結する。

最後に科目別にみよう。まず英語。言語でしかないので、賢くなくても英語を母語として育てば、一定の「英語力」は身に付く。「英語力」の確認では点差がつかないので、無理矢理に点差が生じる出題をしてきたのが、受験英語なのである。無駄な勉強＝ガラパゴス化につながる。次に国語。多くの大学で古文のウェイトが高過ぎるのではないだろうか？大問が二つで、その一つが古文というのは奇観だろう。教養としては重要だが、大学で学ぶ上での必要性はほぼゼロだろうから、「ガラパゴス化」だ。最後に数学。日本語のオカシイ出題が散見される。筆者が見た実例では、問題文に主語が無かった。主語がないと普通には英訳できない。知人たちの反応は、「数学でもこの分野は言葉遊びのパズルのような出題が多いから」というものであった。数学ですら「ガラパゴス化」が生じているのだ。

ガラパゴス化した入試問題を高校生に提示し続けて科挙を笑えるだろうか？ただ、再検討に値する改革案が提示されてきた。センター入試を大学進学資格試験に位置付ければ、「ガラパゴス化」問題の相当部分を改善する途が開けるのではないか。近年の英語入試改革は受験英語産業の反撃で挫折したが、実用英語への流れを止めることはできないだろう。